

旧皇大神 宮社家 柳家寄贈図書について

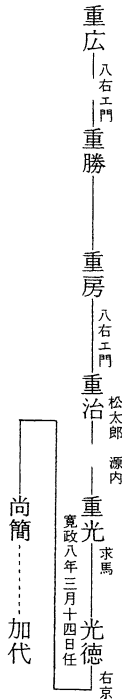
附、蔵書目録

柳家は、もと内宮門前町の宇治中之切町に住む皇大神宮社家（荒木田氏）の流れを汲む古い家柄である。このたび、同家の子孫にあたる柳加代氏（皇學館大學旧職員）の御厚意により同家が襲蔵されてきた蔵書が当研究所に寄贈された。そのため、柳家並びにその蔵書について簡単に紹介し、併せて、その『蔵書目録』を附載し、一般の参考に供することにした。

柳家について

柳家は、柳谷大夫と称し、神宮重代並びに地下権禰宜の家筋であった。宇治会合年寄となる家格を有し、御師として陸奥国・伊勢国ほか数箇国に檀家を所持していた。

いま同家の系図を蘭田守良編『内宮職掌家譜』等によって掲げると次の通りである。



いま、寄贈図書の書写奥書などを調査すると、その蔵書は柳家の社家の最後にあたる柳尚簡（ひさあきら）が集書・書写したものが、その大半を占めているように思われる。

この尚簡の履歴については、天保元年（一八三〇）十一月五日に生まれ、明治三十二年（一八九九）正月二日に七十歳で没した。坂長和（梅谷家に養子縁組）の五男で、初め山本末儀の養子となるも（この時、末加と改名）、文久元年（一八六一）十一月に坂家の籍に復する。次いで慶応元年（一八六五）九月に柳吉利の養嗣となる。明治三年十二月に一旦絶家した坂尚包の家を再興させるが（この時、尚簡と改名）、再度、柳家に復帰する。もと末加（すえしげ）で、幼名

尚鷹、通称は五郎・縫殿之助・主膳で、別に南亭・五十巢之屋と号した。

その職歴については、弘化元年（八四四）

三月、皇大神宮権禰宜に補され、明治四年の神宮制度改正によって従来の職を解かれたが、すぐ神宮権禰宜に補され、庶務課長以下の役職を歴任した。同十六年十二月に神宮禰宜に補される。同二十六年に辞職の後、官幣大社広田神社禰宜（在職五年）となって、終身神明に奉仕している。その間、明治初年に度会府宇治学校の権教授・訓読に任命された外、神宮教院の教監にも在職した。

尚簡は国学・和歌に達し、また書を能くし、祭主賀陽宮邦憲王の師範となった。また文人画を浜田評香に習っている（度会人物誌）。

蔵書について

今回、寄贈のあった柳家の蔵書は、その点数は百五十三部、三百六十二冊であるが、その大半が江戸時代後期から明治時代に及んでいる。概して言えば、その構成は、当然のことながら、伊勢の神宮に関するものが四十八部と最も多く、全体の三分の一を占めている。そのなかには、『皇大神宮儀式帳』以下の神書・年中行事書の類、また荒木田氏の系譜類、伊勢の地誌に関するものがあり、その他、



寄贈された柳家の蔵書

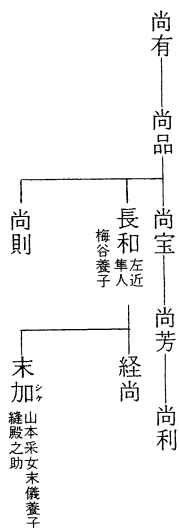
貴重な宇治会合仲間の引付類や明治初年の宇治旧御師関係の書類も含まれている。このほか、国文学（和歌関係の版本が多い）・国史・伝記及び神道関係の書物も比較的多いと言えよう。

同家の蔵書印は「柳氏蔵書」の朱印を捺す。また柳尚簡の書写本の一部には「荒木田末加」「末加之印」「末加之章」「末加」「荒木田末加」「五十巢之屋」「巢屋」「尚簡」の捺印がある。また蔵書印・奥書等によれば、親類に当たる中之切町の御師山本大夫家（末成・末敏）の書籍があるほか、「久志本家」「八羽蔵書」（八羽光穂・光当）の蔵書印を捺したものもある。

なお、これらの図書は、排架が済み次第、当研究所において一般の閲覧利用に応じる予定である。

（本学講師・神道研究所所員 井後政晏）

【参考1】『地下権禰宜家系』坂家系



柳尚簡の墓

宇治浦田町松尾(今北山)の墓地にある。右は妻東雄子の墓。

【参考2】荒木田尚簡の墓碑銘

君梅谷長和君之末男、母丹下氏、天保元年十一月五日生、幼字尚鷹、年弱冠出、為山本末儀嗣子、改末加、産二男、長末温、補権禰宜、以次進正四位、居数年、繼柳氏、明治四年、官改正神宮制度、解君舊職位、而新任神宮主典、尋転祢宜、叙正八位、十年因神宮改革辭職、十五年再任神宮主典、尋転権祢宜、廿六年辭職後、補広田神社祢宜、在職五年、罹病帰郷、而終不起、享年七十、実明治卅二年一月二日也、

蔵書印並びに柳尚簡使用の印章

